

或る日の大伴家持

今日 あした

中庭に面した廂にはうららかな日の光がさして、老木の梅の影が庭土に墨絵のような影を作っている。大宰府にある政庁の奥まった一郭に大伴家持（おおとものかもち）が居を落ち着けてからまだひと月にもならない。

五十を前に、彼は天皇家の権力闘争のせいで薩摩に転勤させられていたのだが三年が経ち、待ちに待っての移動であった。

だが命じられたのは太宰の少弐。

再びの九州住いである。

家持は傍らの火鉢に手をかざした。火鉢の中にいけてある炭の底の赤い火を見るでもなく目を向けながらこれで良かったのだと思った。

傍らでは妻が先程から書きもの机に向かって文をしたためている。

先の薩摩住いはいわば左遷で、京に住んでいる者にとっては地の果てであった。

「そんな場所に妻を連れて行く訳には行かない」

「それなら尚のこと一緒に行きたい」

「それは叶わぬ」

とのやり取りの末、妻を京に残していたのだが、今回の移動でも京には帰らず太宰府に住むことになったので、早速呼び寄せたのだった。

「坂上郎女（さかがみのいらつめ）はご高齢になられたが、息災で居られるのだろうか」

火鉢に目を向けたまま、家持は、義母への文をしたためている妻に向かって懐かしむようにつぶやいた。

「母は達者にしております」

つい最近まで歌会に呼ばれますと、供の手を借りながらも出向いて恋の歌など詠んでいたようでございます」。妻は笑みを含みながら応えた。そして「太宰に行くとお申しましたら、機会がありましたらお訪ね致しますと、言付かりました」と、楽しそうに言い足した。

義母の大伴坂上郎女は、家持の父、大伴旅人の異母妹で著名な女流万葉歌人の一人である。彼女は初め安積親王の寵愛を受けたが、親王が没した後、藤原麻呂の妻となった。麻呂と離別後は異母兄に当たる大伴宿奈良麻呂に嫁ぎ、長女、次女、二人の娘を生んだ。彼女は住んでいた場所が坂の上だったのでこの呼び名になったのだ。

この長女が、家持の目の前にいる妻である。

家持は十歳の時、ここ大宰府にいたことがある。父、旅人が太宰の帥（だざいのそち）となって大宰府に赴任したので。

旅人には妻との間に子がなかった。そこで側室との子ではあるが、長男・家持と次男・書持（ふみもち）を太宰に同行させた。兄弟は大伴本宗家を継ぐ立場にあったのだ。妻もそのように二人を遇していたのだが、長旅の疲れで、太宰に着いた翌月に亡くなってしまった。

妻を失った父の旅人は、深く悲しんでいた。

駿（しるし）なき ものを思はずは 一杯（ひとつき）の

濁れる酒を 飲むべくあるらし

生ける者 遂にも死ぬる ものにあれば

この世なる間は 楽しくをあらな

酒をのんで忘れようとか、この世にある間は楽しく過ごさなければとか、旅人の歌は直截的で豪快だが、家持の記憶の中では父は辛そうだった。

旅人は二人の息子の教育の為に、妹の坂上郎女を呼び寄せた。

彼女が二人の娘を伴ってやって来たので、義母が亡くなってからの暗く沈んでいた大宰府での生活は、急に明るく華やいだものになった。

家持と書持、それに姉妹の四人は、勉強にしろ遊びにしろ、いつも行動を共

にし、度々供を連れて馬に乗り山野をも駆け回った。

義母に文をしたためている妻を見ながら、なつかしくあの頃のことを、家持の頭の中を去来する。

坂上郎女は社会の多方面に関心が深く、教養も多く身につけていたので家庭教師にはうってつけの人材だった。家持の歌人としての才能は彼女の指導なくしては開花しなかったかもしれない。

「義母上とは様々な歌会で顔を合わせたか、才たけたお人だった」

家持はそう言いながら坂上郎女のいつも恋をしているような、生き生きとした歌や、伸び伸びとした人柄を思い出していた。

今もかも おおき 大城の山に やま ほととぎす

鳴きとよむらむ 我をけれども

大宰府政庁は大野山のふもとにある。山頂の大野城から眼下を眺めながら坂上郎女は、私達兄弟をまえに、

「私がいなくなっても何も心配はいらないのよ」、とばかりにこの歌を詠み、一足先に京に帰ってしまった。あの時は、子供心にも身辺を彩っていた美しい花々が急に無くなったような淋しさを味わった。

家持は正真正銘、貴族の御曹司である。日本書紀によると、天孫降臨の折り、大伴氏の遠祖天忍日命（あめのおしひのみこと）が武装して先導したとされている。大伴家はそれ以来の天皇の側近である。

家持の祖父・安麻呂は、平城遷都に際して朝廷から左京の佐保川のほとりに広大な土地を賜った。そこを父の旅人が受け継ぎ、父の死後はその正当な相続人である家持、書持兄弟が受け継いだ。父の旅人が亡くなったのは、家持が十四歳の時でまだ元服前であったが、莫大な遺産がある上、律令制度には蔭位（お

んい」という制度があって、父、又は祖父が高い位階を持っていればその子が成人した時には高い位階を賜ることが出来る。

家持の場合、祖父も父も大納言・従二位と高い位だったので申し分なく、ゆるぎない未来が約束されていた……はずだった。

冬のやわらかな陽射しは廂の奥まで伸び、明暗の線をくつきりと作っている。

「薩摩でのお一人の暮らし、案じていたのですよ。あなた様が託してくださいる疾風（はやて）の持ち帰る便りばかりが慰めでした」

妻が言っているところに当の疾風が廂伝いにこちらにやって来た。

「まことに左様でございました。京に戻ると奥方は夢中で旦那様のことをお尋ねになられる。あまりにご心配をなさるので、又すぐに薩摩へ向かう、の繰り返しでございました」

血色の良い疾風は両頬に笑いを含ませながら、二人を等分に見て一礼をする。と家持宛に申し付かっていた書付を差し出した。

疾風は、親の代からの大伴家の従者で、家持と同じ年恰好。共に武芸を磨いた兄弟のような間柄であることから、飛脚のように俊足で懸命に役を仰せつかってくれる彼をからかって、はやて、というあざなで呼んでいるのだ。

大宰府政庁に届いた書付には、恵美押勝の乱が鎮圧された後のことが書かれていた。恵美押勝とは藤原仲麻呂のことである。押勝本人やその子等が皆、殺されたとあった。

家持の眉が一瞬曇った。仲麻呂は、家持の一人娘・佐紀郎女の舅である。別れたとはいえ、娘婿の久須麻呂も平城宮の庭で射殺されたと書かれている。

家持が想像したその姿は、七年前、杖で打ち殺された橘奈良麻呂の姿と重なった。

「一寸先はわからないものがございますね」。

疾風も家持と同じ事を思ったのだろう。

天皇の側近の大伴家は、常に天皇家の権力闘争の渦中で翻弄される運命にあ

るのかも知れない。

七年前の奈良麻呂の変。

聖武天皇が退位した後、聖武天皇には長男の安積親王がいたにも拘らず、光明皇后との間に生まれた内親王が、孝謙天皇となり即位した。この譲位には光明皇后の実家、藤原家の力が大いに働いていた。その為、新天皇の権限は実質的には皇太后になった光明と、その後ろ盾である藤原仲麻呂が握り、政治も軍事も彼等の思いのままだった。そんな藤原一派を見るに見かねて打倒して別の天皇を立てようと橘奈良麻呂がクーデターを企てた。

これが奈良麻呂の変である。

家持にとって、藤原仲麻呂は娘の舅である。いわば親同士の話し合いから仲麻呂の息子の久須麻呂と家持の一人娘は結ばれた。

一方、クーデターを企てた橘家と大伴家とは親の代から昵懇の仲であり、家持は、奈良麻呂の父である橘諸兄（もろえ）をととても尊敬していた。

両者共が、家持は自分に味方をすると思っている。

迷った。

本来なら天皇になるべき安積親王を、卑劣にも死に至らしめて、孝謙天皇を強引に即位させた藤原仲麻呂らのやり方は決して許せない。

だが、天孫降臨の昔から天皇の警護役をして来た大伴一族の使命がある。

それは天皇を守ることである。

筋を通すためには情を断たねばならない。とはいえ、奈良麻呂側に不利になることを天皇側に知らせることは出来ない。

天皇側は煮え切らない家持に腹を立てる。

奈良麻呂側は内情を知っている家持が天皇側についていたので信用できなくなっ
た。

家持はどちらからも蚊帳の外に置かれ、両方から恨まれる立場になった。

追いつめられた心境を詠んだ家持の生涯の代表作とされるうた三首である。

春の野に 霞たなびき うら悲し

この夕かげに 鶯鳴くも

わがやどの いささ群竹 吹く風の

音のかそけき この夕かも

うらうらに 照れる春日に 雲雀あがり

心悲しも 独りし思へば

「奈良麻呂の変の折には、私は、もう命は無いものと覚悟を決めておりました」。

疾風が言った。

屋敷の前で不意に後ろから刀で切りつけられた時には、闇がたちこめていて、天皇側か、奈良麻呂側か、どちらの追手か判断がつかなかった。幸い日頃の鍛錬で難を逃れ邸に逃げ帰ったが……

「相手を突き止めてまいります」。疾風がすぐにも踵を返そうとすると、

「待て」と家持は息を整えながら留めた。そして、

「どちらの側にも命を狙う理由があるのである。良いではないか、こうして生きているのだから」、と声を落とし己に言い聞かせるように言った。

家持が何より辛かったのは、奈良麻呂の変が密告によって明るみに出たからだった。凄惨を極めた尋問、拷問は執拗に続いた。

孝謙天皇を頂いた現政権は、反対勢力を見るも無残なやり方で根絶やしにしようとしたのだ。奈良麻呂を始めクーデターを企て、同調したもの、そのほとんどが家持と歌を詠み交わした友であったが、皆、公衆の面前で皮が裂けるまで、骨が砕けるまで杖で打たれ、ほんの少し関わっただけの者まで死に絶えた。

中でも、幼いころから知っている陽気で一本気な奈良麻呂の最期は、家持に深い傷を残した。

疾風が持つて来た書付にある恵美押勝の乱のことは「京で急変が起きた」と

いう文書によって承知していたが、あの奈良麻呂の変からわずか七年しか経っていない。飛ぶ鳥を落とす勢いだった藤原仲麻呂は右大臣になり天皇から恵美押勝の名を賜って意気揚々としていた筈なのに……。

反乱を起こして殺されたこと自体、信じられない思いだった。

「この度は薩摩にいたので、天皇家の争いに巻き込まれることは無かったが、もし京にいたら、仲麻呂が後見をしていた現・淳仁天皇のお味方をしたであろう」

「それはまた、物騒なことでございます」。

疾風は悪いことを吹き飛ばすように調子つばずれの声を出した。

先程からすっかり文を書くのをやめて二人の話を聞いていた妻は、心配気にも夫の顔を伺っている。疾風は再びひょうきんな調子で身振り手振りを交えながら

「七年前の奈良麻呂の変の後の因幡への転勤は、いわば左遷でございました。家持はあきれ顔で疾風の方を向き、再び火鉢に手を添えて目を落とした。そんな主人には遠慮もせず疾風は言葉をつぐ。

「その後、従五位上になられて、平城京に戻られたのは栄転ではございました。ですが、京に戻られたらすぐに〈藤原良継の変〉に巻き込まれて又しても薩摩へ左遷でございましょう。

ふり返ってみますれば京から遠く離れているのが身の安全というものでございます」。

妻は、疾風の大きな表情で嘆く仕草の面白さに、思わず手で口元を覆いクツと声に出し、いつもの明るく屈託のない顔に戻った。

「疾風の言うことよ……」

家持も顔を二人に向け苦笑いを浮かべた。

奈良麻呂の変が残酷なやり方で片がついたあと、力を誇っていた光明皇太后が亡くなり、孝謙天皇は上皇となった。誰に気兼ねをする事も無くなった阿部

仲麻呂は、再び自分の意のままになる淳仁天皇を即位させた。

施政は仲麻呂の思いのまま、早速、唐の制度に倣って近江にも第二の都を造営することにした。

石山寺はこの都の鎮護の為に造られた寺である。

その石山寺への行幸の折、孝謙上皇が病気になる、つき従っていた禅師・道鏡が看病を行った。上皇の病気は道鏡の秘法によって間もなく快癒したが、それ以来、上皇は傍目にもわかるような深い愛情を道鏡に注ぐようになった。

口さがない官人たちは、道鏡と孝謙の仲を面白おかしく噂した。それを伝え聞いた仲麻呂は、淳仁に注意をさせようとしたが、孝謙は

「無礼者！」と怒り、二人の間は険悪になった。

上皇と言っても生身の人間である。孝謙の心に道鏡に対する激しい思慕の情が芽生えても何の不思議もない。彼女はこれまでに自分が恋情をもって接することができるような異性に会ったことが無かったのだ。

恋する上皇は強い！

丁度その時期に、吉備真備が大宰府での勤務を終えて平城京に戻った挨拶に孝謙の元にやって来た。孝謙上皇はこの機を逃してはならじと、淳仁天皇との対決について思うところを話した。

吉備真備は百戦錬磨の強者である。

上皇の意を受けて、先手必勝とばかりに上皇の兵を動かし、天皇が全国の国司に号令するために必要な、印(おして)と鈴を淳仁天皇のもとから奪い取り、仲麻呂の退路を断って一網打尽に打ち負かした。

孝謙上皇は、その後天皇に返り咲き称徳天皇となった。

そして道鏡禅師を太政大臣禅師として共に政を行うようになった。

「いやいや」疾風は、美しい家持の妻が明るい顔をしていると嬉しくなつて、ついつい機嫌を取ってしまう。

「太政大臣になったのが、なんといつても禅師でございましょう。乱に加担し

た者に対しても、あの仲麻呂のような残忍な仕打ちをするようなことは、金輪際ごさいますまい」。

「疾風は、見て来たようなことを申すものよ」。家持も珍しく冗談を言った。言いながら傍らに積まれてある歌集を手を取った。表に、新しき年にことよせてと書かれています。

新しき 年の初めに 思ふどち

い群れて居れば 嬉しくもあるか

気分を変えるように家持は歌集の中の道祖王の歌を声を出して読み上げた。その楽し気な歌をみているうちに、皇太子であった道祖王が藤原仲麻呂によって廃された事、かつて親しくつきあってきた人々が虫けらのように殺されてしまったことなど次々に脳裏を駆け巡った。

あの方々は普通に生活をして、その時々を歌を詠み、誇り高く生きてきたのに……さぞや、無念であったであろう……。

大宰府に戻った家持は、長い間中断していた歌集の編纂を再開していた。行李の中には奈良麻呂の父、橘諸兄から託された歌集だけでなく、家持自身の歌や家持が集めた歌があり、その中には父・旅人や叔母・坂上郎女から受け取った歌もあった。それらの歌集をひもといってみると、父が太宰帥時代に書き記した歌が数多くあり、子供時代の妻や妹、もう亡くなった弟の書持等と野原を駆け回った情景が再びよみがえった。

九州にいる間に、遣唐使や防人等の歌に詠われている場所をなるべくたくさん巡ってみたい。家持は突き上げるようにそう思って、傍らに目を遣った。そこにはふつくと年老いた妻がいた。

〈完〉

参考資料

大伴家持・廣澤 虔一郎 大伴家持・北山 茂夫・平凡社
大伴家持大辞典・小野 寛 大伴家持・中西 進